
Run Away

山田 京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Run Away

【コード】

N8776H

【作者名】

山田 京

【あらすじ】

ただ逃げてほしかった。ただ生きてほしかった。救えるのは、彼女しかいないから…

磨れた場所で（前書き）

著作権は作者にあります。用法用量を守り、正しくお使い下さい。

廃れた場所で

町外れの廃ビル。

そこは酷く寂しい場所に建っており、地元の住民ですら訪れることは皆無に等しい。

そんな廃ビルの屋上に、一人の少女が立っていた。フェンスの無いその屋上の端で、彼女は俯き遙か下の地上を見下ろしていた。

コツ、コツ

薄暗く急な階段に、一人分の足音が響く。その歩調には疲れた感じこそ微塵も無いが、微かに緊張の色を持っていた。

どれだけその階段を上っていただろう。

屋上の扉の隙間から漏れた日の光が見え、その足音の持ち主の少年は、さらに緊張の色を濃くした。

「神崎 綾だな。」

いきなり背後から自分の名前を呼ばれ、少女は地面に下ろしていた視線を素早く後ろへと移した。

そこには少年がいた。

（空耳じゃなかった）

誰も居ない、誰も来ないと思っていた場所できいきなり自分の名を呼ばれ、少女は軽いパニックに陥っていた。

「…神崎、綾…だな？」

こちらを見つめたまま動かない少女に少しだけ不安になった少年は、もう一度彼女の名前を呼んだ。
すると少女はゆっくりと一度頷いた。

さっきまで驚きの色一色だった彼女の眼は、もう一度名前を呼ばれたことで冷静さを取り戻した様だ。

（確か、年は17だったはず…。）

そう思い少年は、彼女をよく観察した。容姿は年相応だと思っただが、雰囲気は年齢よりも少し大人びている気がした。（…いや…大人びているというより疲れてるといったほうが正しい…かな？）

少年は自分の思考を曖昧気味に訂正した。

少しずつ冷静さを取り戻した少女　神崎綾は、黙つたまま自分を見つめてくるこの少年　というより、誰も来るはずのないこの場所に突如出現したこの少年を警戒した目でよく見た。年はおそらく同じくらい、背は180cm程だろうか、特徴らしい特徴はないように見える、が

（嫌な感じ…）

その眼が嫌だった。別段目付きが悪いわけではないが、何を考えるのか分からない、こちらの思考を全て見透かしてくるようなその眼が。

「なあ」

唐突に少年が話しかけてきた。

「なに？」

綾は少し間を置いて返事を返した。

「一緒に来てくれないかな？」

少年の声は少しだけ緊張していた。

白いセダン車の中。助手席に座る綾は、ぼんやりと窓の外を眺めていた。

「驚いた」

運転しながら少年は言った。綾は少年に軽く視線を送った。

「いや、こんなにあっさりついて来てくれるとは思わなかったから確かにそうだ。少年に言われ綾は思った。見ず知らずの人について行くなんでどうかしてる。知らない人にはついて行かないようにと親に注意された記憶は無いが、そんなこと小学生でも知ってるし、もちろん綾も知ってる。

（じゃあ何故？）

綾は自問した。

答えはすぐに出た。でもその答えを少年に言うつもりはなかった。

「…そういえば」

綾が呟いた。

「え？」

少年は疑問の声を上げる。

「名前」

「名前？」

「あなたの名前。聞いてない」

そういえば自分の名前を告げてないことに少年は気付いた。というか、自分のことを綾に何も知らせていない。何故綾を連れていこうとしているのかという理由も、何処へ向かっているのかさえも。少し申し訳ない気持ちになりながら少年は言った。

「名前は矢代ヤシロ 雪ユキ。名前呼ぶ時はユキで良いよ。年は18。君を連れて来た理由は目的地に着いたら言うから。」

少しの間。

「ユキ…」

綾が呟く。

ユキは不思議そうな顔をする。

綾は続けて呟いた。

「女みたいな名前」

「…そういう事は言わないでほしかった…」

ユキの顔が残念そうに歪んだ。白い車は順調に目的地まで2人を乗せて走っていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8776h/>

Run Away

2010年10月9日23時52分発行